



TITLE:

清代咸豊朝における淮南鹽政

AUTHOR(S):

佐伯, 富

CITATION:

佐伯, 富. 清代咸豊朝における淮南鹽政. 東洋史研究 1955, 13(6): 505-527

ISSUE DATE:

1955-03-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/139026>

RIGHT:

清代咸豐朝における淮南鹽政

佐 伯 富

目 次

- 一、長江梗阻と票法の崩壊
- 二、鄰塩の借運
- 三、鄰稅（塩釐）
- 四、就場徵課
- 五、官運の倡行
- 六、結 び

一、長江梗阻と票法の崩壊

淮南鹽政は陶澍と陸建瀛との改革によって、明代以來の積弊が廢除せられ、その成果には見るべきものがあつたが、陸建瀛の淮南鹽政改革と同じ年、即ち道光三十年（一八五〇）には廣西に洪秀全が叛亂を起し、その勢力は燎原の火の如く蔓延し、數年にして數省を席捲し、咸豐三年（一八五三）二月には江寧（南京）も陥落した。これがために、淮南鹽法紀略卷三「湖廣督院官〔文〕由楚招商採辦淮鹽摺」に楚省例食淮鹽。自咸豐三年。粵逆踞擾金陵。江路梗阻。商賈星散。

淮鹽片引不至。

と見え、又清鹽法志卷一一四には

咸豐軍興。岸懸商散。北則軍隊林立。餉鹽充斥。南則江路梗塞。

片引不行。票法於是乎大壞。

と見えるように、淮南鹽政は根こそぎに崩壊した。太平軍が漢口・武昌・安慶・九江・蕪湖・江寧・揚州・鎮江等、揚子江沿岸の主要都城を陥落し、江路が梗阻すると、淮南鹽はその行塩地の大部分をうしなうこととなり大打撃を被つた。

この淮南鹽の運銷に致命傷を與えたものは行塩地の喪失と共に運商即ち運塩商人の沒落である。全國の大資本を擁する運商は、概ね淮南鹽の集散地揚州に集り居住してゐたのであるが、淮南鹽法紀略卷一「督鹽院怡〔良〕就場徵課并改道運銷摺」（咸豐三年九月）に

逆匪由湖廣竄。至九江・安徽江寧。并陷鎮江・揚州兩府。不特淮

南引地。無不被其蹂躪。即商人之於鎮・揚二郡者。十有八九。亦悉遭荼毒。以致鹽務更形敗壞。

と見えるように、揚州・鎮江の運商は殆んど全部その陥落によって没落したようである。初め揚州の鹽商は太平軍の揚州に迫らんとするや、贖金して太平軍に賄い、その攻略を免れんとしたが、太平軍の方でも餘程鹽商の財には目が眩んだと見えて揚州を陥落している。この大資本を擁する揚州・鎮江の運商の没落が運鹽に蹉跌を來したことはいうまでもないであろう。

運商が没落すれば鹽場で鹽を收買する場商も自ら没落を免れない。場商が鹽場の鹽を收買しないと、竈戸の鹽は販路を失うので生産を停止するか、或は生産鹽を闇に流さざるを得ない。當時淮南では竈戸の鹽の出賣が行われず、鹽場には鹽が山積し、鹽一斤一錢にまで暴落した。そのため鹽場の多數の竈戸が困窮するのみならず、鹽の運搬を以て生業とする數十萬の勞働者が失業を免れない。これを放置すれば彼等が賊の陣營に走るのは火を賄るよりも明らかである。實際この頃は、特に淮南鹽場の鹽が多量に太平軍の陣營に流れてその密賣に供していた。駱秉章の「採買淮

鹽濟食分岸納課濟餉疏」(駱文忠公奏議卷五湘中稿乙卯下)に

今淮鹽之利。不歸於官。不歸於民。而且潛歸於賊。(中略)各處並有販運穀米硝磺。潛越下游荒僻洲渚。搬堤轉壩。與賊易鹽。獲利之事。姦民冒死趨利。本爲法所難防。小民方虞買食維艱。豈遑問其所自。

と見え、又曾文正公全集奏稿卷六「請部撥浙引用鹽抵餉摺」にも

淮南之鹽。奸民偷送賊營。粵匪賤售於各口岸。大獲其利。江西南路食粵私。北路食賊之私鹽。湖廣南路。食粵私。西路食川私。東北亦食賊之私鹽。以本來富有之物產。不克設法行銷。自食之而自利之。而反資以爲賊之利。誠可惜也。

と見え、また清鹽法志卷一三二咸豐五年四月の條には去年自岳州以下新隄起。及武・漢・黃州。下至武穴・龍坪・九江等處。皆食賊中之淮鹽。皆從賊營賤售而來。本年在江西。見東北各州縣。徧食賊中私鹽。國家大利。國家引地。該逆暗中奪去。殊堪痛恨。

と見えている。

以上は主として生産・運搬の部面から淮南鹽崩壊の狀況を考察したのであるが、消費の面においても、その對策が

強く要望せられていた。いま湖南省に例をとってみると、湖南省はこれまでその消費の七八割までが淮南鹽に依存していた。商人は穀米・煤炭・桐茶油・木紙・鐵その他の土産を漢口まで運搬して販賣し、その見返りとして鹽を買い求めて歸り、これを各州縣に販賣していた。

一體、淮南鹽は湖北・湖南・江西がその主要な行鹽地であるが、江西省では粵鹽・浙鹽・閩鹽などの隣私が甚だしく、湖北省では川鹽・潞鹽・淮北票私の侵灌が旺盛であつて額鹽が滯銷していた。ところが湖南省は產鹽各省から遠く隔っており、且つまた粵鹽も三峽・五嶺の險があり、侵灌が困難であるため、江西・湖北に比べると、淮南鹽の行銷が容易であり、額引の外になお湖北額引のうち十萬引を融銷しているほどであつた。しかるに、太平軍が南京を占領し長江が梗塞して以來、淮南鹽は片引も來なくなつた。また、この頃廣東・廣西でも事故が多く、粵鹽も來らず、湖南省では鹽が缺乏し鹽價は暴騰して民衆は困窮した。元來湖南省は穀倉として米の生産が甚だ多く、農民は米を賣却することによって生計を立てていたのであるが、丁度咸豐五年の頃は武昌・漢口が太平軍に占據せられたために、

米の販路を失い、農民は穀一石を以てするも鹽十斤を賣ることが出來ぬ有様で淡食に苦んでいた。また軍人も鹽の配給がなく、筋力が疲乏して病氣となる者が多く、當時湖南省においては鹽の缺乏が重大問題となつていた。

鹽の缺乏は湖南のみならず、湖北・江西・河南・江蘇・安徽など他の行鹽地域においても全く同様で、民衆は鹽の缺乏のために苦んでいた。この民衆の鹽の缺乏に乗じて太平軍が淮南鹽行銷の要衝を占據して鹽利を獨占しようとするのみならず、恐らく鹽を民衆に配給することによって、民心の收攬を計るということもやつたであらう。こういう點からも、民衆に鹽を配給してやるということが政府としても喫緊の急務であつたわけで、ここに一時的な便法にもせよ、何とか鹽政の改革をせざるをえない必要に迫られて來たのである。

一方、政府としても、太平軍鎮定のため、多額の軍事費を必要としたのであるが、鹽政の崩壞によって多額の收入を失つていた。咸豐初年、淮南鹽は陸建瀛の鹽政改革によつて五百餘萬兩の收入をあげていたが、これを殆んどみな失つてゐる。⁵⁾ 前掲駱秉章の上奏文中に

國家兩淮鹽課正雜各款。每歲共銀六百餘萬兩。爲經入一大宗。三載以來。兵餉增數千萬之出。鹽課失二千萬之入。兵事方殷。餉源早涸。用兵各省。均抱隱憂。

と述べているように、鹽政の弊壞によつて重要な財源たる鹽利を失つたということは、政府の財政には大打撃であつたに相違ない。こういった政府の立場からも淮南鹽政の改革が焦眉の問題として要望せられるに至つたのである。

ところで淮南鹽の行鹽地として最も重要な位置を占めるのは湖北・湖南・江西の三省であつた。淮南額引は陸建瀛が淮南鹽政を改革した際百九萬餘引と定めたのであるが、そのうち湖北は約五十五萬餘引、湖南は二十二萬餘引、江西は二十七萬餘引行銷してゐた。即ちこの三省を以て淮南鹽の殆んど全部を消化してゐたわけである。就中湖廣は淮南鹽の約七割を行銷してゐたのであるが、鹽課においてもまたその六割を湖廣から徵收してゐた。曾文正公全集奏稿卷三三「請禁川私行楚收復淮南引地摺」に

楚省本係淮南引地。定額最多。銷鹽最廣。從前淮綱盛時。歲徵各岸課銀。甲於天下。徵諸蘇省者。不及十之一。徵諸江西安徽者。不過十之三。徵諸兩湖者。則居十之六。是淮綱之興替。全視楚岸之暢滯爲轉移。

と見えるように、湖北・湖南が淮南行鹽地においていかに重要な地位を占めていたかということが判明するであろう。淮南塩政の改革が先づ湖廣から着手せられたその理由は主としてこの點に存したものと考えられる。

二、鄰鹽の借運

先ず湖北に於ては、湖廣總督張亮基の奏請により、咸豐三年二月、鹽缺乏の應急策として四川鹽二千引を借運することとした。最初は潞鹽、淮北鹽等の借銷も議に上つたが、共に程途遙遠で、中途には山嶺が重疊する所もあつて陸運の要があり、多額の運送費を要する。これに對し、川鹽は揚子江により、容易に船運することが出来るから、運送費が安價である。又成本も輕く塩質も良好であるので、遂に四川鹽借銷と決定した。ところで太平軍が漢口を竄擾して以來、票商大商は逃亡して請負う者がない。官運を行わんとしても資本がない。已むを得ず、天子より四川督臣に勅し鹽茶道に飛飭して、川鹽二千引を借搬してもらい、鹽課その他の項款は、湖北鹽道より四川に解交することとし、江路肅清し、淮引が通暢するを俟つて、舊章に照して辦理

することとした。⁸⁾

因みに、この便法は江路肅清後も舊制に復する能わず、ながく川淮雙方の政治家・商人の爭論の中心問題となつたが、遂に未解決のまま清朝は滅亡した。蓋し、一度、四川鹽を淮南行鹽地に行銷することになると、増産を行わなければならぬ。これがために新たに労働者を雇傭しなければならぬ。また生産鹽を四川から湖廣に運搬するためにも多數の労働者を必要とする。元來四川省は豐沃な地であり、各省から流民が流れこみ、嘉慶の中頃には陸上から流入した者を除き、揚子江の江上労働者の四川に逗留する者だけでも毎年十餘萬人を下らなかつた。これらの流民が騷亂を起さなかつたのは鹽務關係の労働に雇傭され自活の道が開かれていたためであるといわれている。⁹⁾ところが今太平軍の叛亂が平定し、江路が肅清したからといって、直ちに四川鹽を淮南行鹽地に行銷することを禁止すると、四川鹽務に關係した多數の労働者が失業の憂目にあわなければならぬ。多數の失業者を放置することは叛亂の勃發を默認することにもなるので、爲政者としても四川鹽の淮南行鹽地への行銷を容易に停止することが出来なかつたわけである。

同様の労働者の失業問題は淮南鹽場並に行鹽地においても惹起した。淮南鹽の生産・運搬・販賣の組織が四川鹽のそれに數倍する大規模のものであっただけに、労働者の失業問題もさらに深刻であつた。曾文正公全集奏稿卷三三「請禁川私行楚收復淮南引地摺」に

淮南通泰二十場。垣商煎丁以及鉤損・捆忙人等。不下數百萬。兵荒年久。困苦顛連。為從來所未有。……場商倒歇之家固衆。而煎捆各役失業之人尤多。比之川省業鹽者。何止數倍。

と見え、また、「楚岸未便改運粵鹽並川鹽侵占情形疏」(盛康皇朝經世文續編卷五二)にも

運商亦因楚岸不銷。觀望不前。今年垣產甚旺。……場商猶以款少鹽多。不能偏收。深恐竈丁賣私通梟。尤慮其貪極生變。而船戶數千。亦因無鹽可運。窮迫無聊。蓋淮南自官商以至船竈夫役數十萬人。此兩月間。皆皇皇焉若生計之將盡者。

と見えている。前掲の不下數百萬は不下數十百萬と訂正すべきであらう。右の記載によつても判明するように、淮南鹽の生産・運搬・販賣に關係して生計を立てている労働者商人等は數十萬人乃至百萬人に達し、その家族を數うれば數百萬人にも及ぶであらう。曾國藩の右の上奏文は淮南行鹽地が太平軍に占據せられてから後十數年後の情況につい

て述べたものであるが、淮南行鹽地の喪失によってかかる多量の失業者が生じたのである。淮南行鹽地の收復問題が清朝末において重大な政治問題と化した所以も實にここに存したわけであるが、この問題についてはさらに稿を更めて論ずるであらう。

ところで、隣鹽の借銷は湖南においてもおこなわれ、これより先、張亮基の湖南巡撫の時代に粵鹽を借銷している。¹⁰⁾しかし、四川官鹽の借銷はこと創始に屬し、章程が未だ充分に備わらなかつたので、最初はあまり効果がなかつたが、咸豐五年（一八五五）官文が湖廣總督となり、宜昌・沙市に局卡を設け、私鹽の緝捕につとめ、鹽課の收納に努力した結果、漸く成果を収めつつあつた。¹¹⁾然るに、咸豐十年（一八六〇）四川省には匪徒の叛亂が勃發し、井竈產鹽地區は蹂躪せられ、商賈は形勢を觀望して前まず、四川省内でも鹽の缺乏を來したために鹽價は驟かに増長し、每斤八九十文から百文以上にはね上つた。ちようど、この頃楚北では水師を整頓し、長江上下には礮船を分設して巡防を嚴にしたために、商船は隨時挽運しうる状態にあつたので、漢口で楚商を招募し、資本を湊集して淮南鹽場に赴いて鹽を收買

せしめ、淮運を利導すると共に、楚岸の缺鹽、鹽價の昂貴に對處せしめてゐる。¹²⁾

ところが、水師を整頓して巡防を嚴にしたため江路が暢通したとはいふものの、なお沿江の各處に太平軍の陣營があつて蠢動を續けたので、鹽の挽運が危険であつた。その上鹽價水脚等の成本が過重であり、而も沿江各處の鹽釐の徴收が甚だしく、従前の正課の數倍にも上る有様であつたので、應募の楚商がなく、大した效も収めえなかつたようである。¹³⁾この淮塩採買の議については、湖南巡撫駱秉章が已に咸豐五年に淮塩十萬引を採買し、浙河に道を借りて搬運し、民食を足らし餉需に充てんと請うたが、江西運道未だ肅清せられず、實現に至らなかつた。¹⁴⁾

以上は楚省に於ける隣鹽借運の大略について述べたのであるが、江西に於ても全く同様で、太平軍が江寧府を攻陥して以來、江路杜絶して淮南鹽は片引も至らず、咸豐三年五月には、應急の策として差當り粵鹽六萬引を借撥して民食を救済する策を立てたが、成績香しからず、建昌一府では、鹽商を募集し、閩鹽を採買して民食を濟わんとした。

又南昌等の府では粵鹽が來ないために、更に鹽商を招募し、

浙鹽・閩鹽を採買して濟銷せしめんとしている。然るに、一二の商人が數十引、數百引の鹽を承運せんとしただけで、鹽は少しも運銷せられない。太平軍が江西を犯して以來、民衆の困窮狀態は甦らず、資本家は運鹽を以て畏途となして投資を肯んぜず、商民の採買する者があつても、浙引行銷の江西の廣信府及び安徽の婺源等の處の中途で轉販するに過ぎないので、江西の一般民衆の鹽の缺乏は益々深刻となつて来る。結局鄰地の借鹽も窒礙が多く、鹽商の招徠も功を奏しないので、遂に官自ら委員を選び、浙江省に赴かして浙鹽四萬引を採買し、省城（南昌）に總局を設けて售銷し、目前の急を濟わしめることとした。¹⁵⁾

然るに、この委員採買も結局大した成果を収めることが出來ず、一年間に、豫定採買の四萬引に對し、僅か一千一百五十引を運售しえたのに過ぎなかつた。その原因を釋めるに、太平軍の私鹽が跋扈して官鹽が押されていたからである。蓋し浙江採買の官鹽は浙課、淮課の雙課を収めるのみならず、津貼軍需銀兩等を合すると、每引の成本が十七兩という驚くべき高額に上つてゐる。借行の官鹽價は甚だ貴く、太平軍の私鹽は甚だ賤價である。そこで曾國藩はた

だ淮課二兩六錢八分を納めしめて、浙課四兩九分を免じ、成本を輕減し、浙鹽三萬引を江楚兩省に運銷し、鹽を以て軍餉に抵充し、一面には私鹽を緝捕し、一面には官鹽價を減じようとした。彼の言によれば、自辦の鹽價運送費を以て浙鹽を江楚に運銷しようとし出た商人、顧源興に一切を任せ、浙課を免じ、淮課三萬引分、即ち八萬兩を鹽務衙門に納付せしめず、部撥軍餉銀として直接に商人から受領し、諸種の中間手續を簡略にし、その間に要する多額の規費浮費を省こうという考であるらしい。この上奏文は直ちに裁可せられた。時に咸豐五年四月である。¹⁶⁾

以上は主として江寧失陥によつてもたらされた淮南行鹽地の民衆の食鹽缺乏に對してとつた應急措置について述べたのであるが、併し、政府としては淮南鹽が販路を失つて滯積した結果、鹽課の大部分を喪失したといふことの方がむしろ緊急の問題であつた。こゝに官鹽の鹽課增收策を樹立するは勿論、他方では私鹽に對しても税を徵收する方法を案出するに至つた。これが所謂鹽釐であり、政府としては全く窮餘の策たることはいうまでもない。

三、鹽 釐

鹽釐は咸豐三年（一八五三）五月、張亮基の奏請により、楚省における川粵鹽について始めて設けられたものである。前節において述べたように隣鹽の採買借運が效を収めず、官鹽は殆んど運銷せられないが、これに反比例して隣地の私鹽は行鹽地に滔々として流れこみ、鹽利は盡く私鹽販賣者に獨占せられた。政府ではかゝる既定の事實を已むを得ず容認し、卡を設けて私鹽からも税を抽取し、鹽釐を以て鹽課の不足を補うより外に辦法がなかった。¹⁷⁾蓋し、借銷官鹽價が高價で私鹽に對抗することが出来なかつたからである。例えば、四川省においては鹽每斤十餘文に過ぎないが、湖北に借運した川鹽は、每引十兩にもなる。四川の陸引は每引四百斤であるから、湖北借運の四川官鹽は每斤二分五釐になる。咸豐三年の頃は銀價が暴騰し、每兩銅錢二千文以上になつていたから、假に銀每兩二千文として計算すると、鹽每斤二分五釐は銅錢に換算すると五十文になる。即ち湖北借運の四川官鹽價は四川における鹽價の約五倍になるわけである。四川から湖北まで運搬するに要する運搬費

諸雜費等、浮費がいかに大で、鹽價を増大せしめていたがが窺われるであらう。結局これらの浮費の増大は官吏や胥吏が商人から色々の名義で賄賂を強要したためであつた。粵鹽も全く同様で、楚省における官鹽價は私鹽の二倍であつた。¹⁸⁾

ところが官吏や胥吏は鹽務をもつて利藪と考えているので、政府が鹽務を運営する面が多ければ多いほど、官吏や胥吏が商人から搾取する機会も多いわけで、こゝから鹽務の浮費も多額に上り、官鹽價が昂騰した。政府が從來のような方法で鹽を販賣する限り、官鹽價を私鹽價の線まで引下げることは困難であり、官鹽は私鹽と太刀打ちすることは殆んど不可能であつた。これがために、湖北・湖南・江西省では隣境の私鹽が充斥していたので、湖廣總督張亮基は遂に明の王守仁の立廠抽税の法に倣い、川粵鹽の楚省に入る者は、商民を論するなく、均しく販賣を許し、必ずしも官より借運せず、たゞ楚省の堵私隘口を擇び、道府大員を專駐せしめ、關を設けて抽税し、一税の後は照を給して放行した。¹⁹⁾これ所謂鹽釐徵收の嚆矢である。

鹽釐創設の目的が奈邊にありしやについては清鹽法志卷

一三九 鄰稅に

鄰稅之名。惟兩淮有之。蓋自咸豐年間借運鄰鹽始也。當是時。軍興運阻。楚西鄰私充斥。部議仿明王守仁立販抽稅之法。徵收釐稅。初猶行鹽之省。專爲濟餉計耳。

と見え、また淮南鹽法紀略卷三「楚商試運淮鹽詳」に現在沿江各卡釐捐。皆爲接濟軍餉而設。

とあるように、軍費接濟のためであった。これを實際の例について見ると、咸豐五年には宜昌において抽取した一年餘の鹽釐二十萬餘兩を軍需費に充てゝをり、湖北の樊城・宋家埠等の局卡で抽取した潞鹽に對する鹽釐數千串を防堵の經費として使用している。²⁰⁾

鹽釐はその最初の趣旨が、私を化して官となすにあるから、

查川鹽成本甚重。較之淮鹽倍蓰。若提課太多。販者無利可圖。非裹足不前。即繞路偷越。(清鹽法志卷一三九、咸豐六年三月)

と湖廣總督官文が上奏しているように、あまりに高い税を私鹽に課しては、私鹽は税局を逃避して脱税を計るから、課税の限度を餘程慎重に考えなければならぬ。又私鹽價も各地の個々の事情によって異っているので、一律に課することは困難である。そこで各地夫々その特殊の事情によ

って、その税率を異にするのは已むを得ない。

前述の通り、張亮基の奏請によって、川私・粵私にも課税することにしたが、事草創に屬し、制度が未だ整わないのに乗じ、商人は課税を避けんとしたために、あまり効果がなかったらしく、清鹽法志卷一三九鄰鹽咸豐六年三月の條に

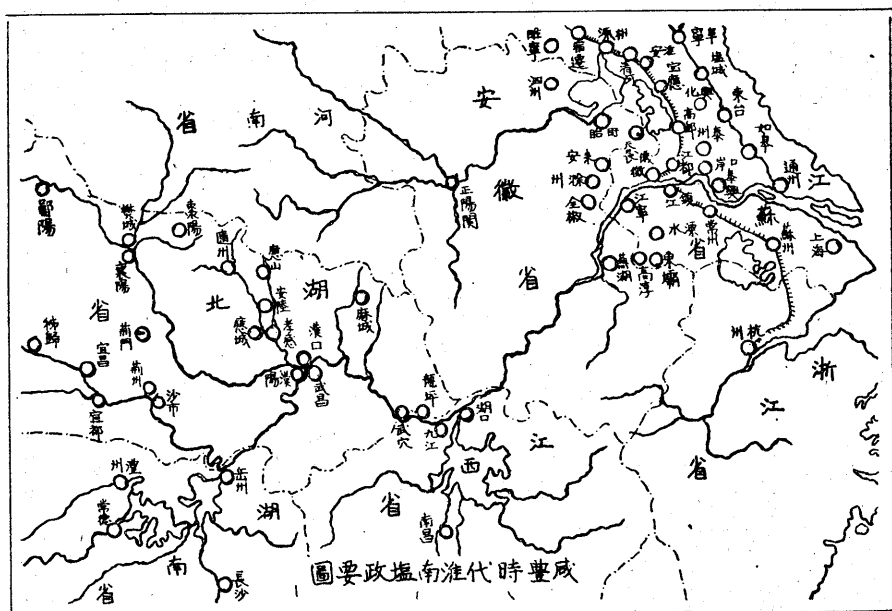
近年楚省借食鄰鹽。以川鹽爲最。前署督臣張亮基曾奏定。借銷川引。化私爲公。試辦之初。責成地方。章程未定。商販抗違。毫無成效。

と見えている。併し、制度が次第に整備すると共に鹽釐徵收範圍も増加している。最初、鹽釐は楚省においては、川私・粵私に對して徵收せられたのであるが、咸豐四年には潞私に對し、更に咸豐五年になると、淮南私鹽・淮北票私に對しても鹽釐が徵收せられるようになっていた。²¹⁾その後鹽釐は江西省その他の地方においても徵收せられるようになり、全國的な制度として擴大せられてゆくのであるが、この事實は鹽釐の收入が相當國家の財政に寄與したことを示している。

最初、鹽釐が創設せられた咸豐三年において、鹽釐の税率がいかほどであったかは不明である。しかし、咸豐四年

八月には、宜昌において川鹽に對し、毎斤銀一釐五毫を抽取し、樊城・宋家埠においては、潞鹽に對して毎斤錢二文を抽取している。²²⁾ところが、軍需費は實に巨額に達するので、已むを得ず、鹽釐の増收を計らんとし、咸豐五年十二月には、川私は宜昌に於て、潞私は襄陽・鄖州・隨州・棗州に於て、票私（淮北）は安陸・麻城・孝感・應山に於て、淮南鹽は太平軍の陣營と接近せる地方に於て、夫々局を設けて抽稅することとし、稅額を毎斤四釐四毫、從來の約三倍に増額した。この額は淮南鹽の正雜課銀每引二兩六錢八分に相當する。かくて翌六年正月には、抽課は五日毎に總督に報告し、二ヶ月目に總督は之を彙總して奏報することにした。然るに、稅課の増額は前に述べたように、私鹽が稅局を避けて通過し、却つて鹽釐の低減を來すこととなるので、咸豐六年三月には、湖北宜昌・沙市に於ける川課の抽取は、輕減して毎斤七文（銀三釐五毫）とすることにした。²³⁾

湖南に於ても、やはり巡撫駱秉章の奏により、咸豐六年七月、粵鹽に對して郴・桂等の州に卡を設けて每包（百斤）七百文（毎斤七文）の鹽釐を抽取している。又川鹽に對し



ても、岳・常・澧等の州にて毎百斤七百文を抽税している。²⁴⁾
又江西に於ても鹽釐を徴收したことは清鹽法志卷一四二鄰
稅に

咸豐七年。在於江西省城百釐局內。兼設鹽稅總局。將各路鄰鹽。
每六百斤。徵錢四千八百文。(每斤八文)並於萬安縣良口。專抽粵
私。每百斤抽釐錢二百五十文。(每斤二文半)

と見えている。以上の記載によつて、咸豐年間に於ける湖
北・湖南・江西に於ける鹽釐は、低い時には毎斤二文から
二文半位であつたが、普通は七八文を徴收したことが判明
する。これらの収入が全部軍需費として使用せられたこと
は前に述べた通りである。この鹽釐は元來、太平天国の亂
を平定する軍餉を接濟するために一時的に設けられた制度
であるが、太平軍の鎮定後も廢止せられず、むしろ從來に
も増して稅率が増大され、軍艦を造り、江防を充實する
という名義で徴收せられ、鹽政改革の阻害をなしたことは注
目すべきである。²⁵⁾

四、就場徵課

江寧の失陷によつてもたらされた淮南鹽の大きな問題は、

政府の立場からすれば、行鹽地の消失、従つて又鹽課の喪
失である。その對策として、鹽課喪失を補うために、一方
では行鹽地において私鹽を化して官鹽となす政策がとられ
た。これが鹽釐であり、咸豐三年五月に創設せられたこと
は前節に述べた通りである。他方、政府では又鹽場におい
て鹽課の増收を企圖した。當時は太平軍が江寧を陥落した
直後で、多額の軍需費を必要とした時であり、政府として
もこの鹽課喪失に對して無關心ではありえない。鹽課喪失
の直接の原因は、太平軍が揚州を陥れたために、鹽商の請
鹽がなくなり、従つて鹽運司の鹽引發行が不可能になつた
ためである。そこで揚州が太平軍の手に陥いると、鹽務の
行政を管理するために、咸豐三年八月、兩江總督怡良をし
て鹽運司を通州・泰州の適中の地に移駐せしめ、運判場員
をしてこれが監督に當らしめ、鹽場に就いて鹽課を徴收す
るという應急の新對策を講ぜしめることとした。²⁶⁾その大要
については、清鹽法志卷一三三商課の條に

咸豐三年。議准。淮南就場徵課。以六百斤出場。作為引半完課。
每一大引六百斤。徵報部正雜銀一兩七錢三分有奇。經費銀四錢五
分有奇。共徵銀二兩一錢八分有奇。各衙門裕利及解部紙硃等項。
一概暫行停止。

と見え、同書卷一四三奏銷には

咸豐三年。議准。淮南就場徵課。於照例奏銷外。將運銷徵課確數。按兩月一次。專摺奏報。以憑稽核。

と見えてゐる。即ちこの改革に於ては、第一科則を格外に輕減して鹽商を招徠せんとするにある。鹽の生産場に於て鹽引を發行して鹽課を徵收するが、一引六百斤に對し引半完課を行い、特別に鹽商を優遇してその來場を獎勵する。

鹽課は正款雜款を合せて二兩一錢八分餘とし、從來の各衙門の裕利・解部紙硃等の項は一切免除する。之を先に道光三十年に陸建瀛が淮南鹽政の大改革を行い、成本の大輕減を圖つた際に於ける正雜款三兩七錢二分八釐餘に比べると、今回の每引二兩一錢八分餘という稅課は劃期的の輕減である。商人はこの鹽課を鹽運司の分司、或は場官衙門、何れに納めてもよく、分司場官は五日毎に鹽運司に收納額を報告し、五百兩以上に達すれば鹽運司に送り届ける。兩江總督は徵收鹽課を二ヶ月毎に奏報して稽核に資し、從來の毎年二・八兩月二回の奏銷を中止した。²⁷⁾

第二には、改道運銷である。揚州・江寧が太平軍の手に陥り、その附近の江路が杜絶したため、鹽運司を揚州から

通・泰州の地に移駐したので、運道の變更が必要になつて來た。即ち、鹽を口岸に運ぶには、長江の北岸から江都縣屬の白塔河等の口に出で、江を渡り、浙鹽行銷地たる常州・鎮江兩府所屬の各口岸を経て、溧水縣の東壩に至り、こゝで鹽を他の船に積みかえ、直ちに蕪湖に達する。かくの如く、出江して以來、運道を繞りて運行するので、運送費・積換費が高くなる。この費用を補填し、商人を恤するためにも、科則の格外の輕減が必要であつたわけである。²⁸⁾

第三、安價な淮鹽が高價な浙鹽の行銷地を通過するのであるから、特に嚴重に淮鹽の浙鹽行銷地侵銷を取り締る必要がある。

第四、如皋縣の許家壩、泰州の勝家壩、江都縣の白塔河の三處に卡を設けて秤掣稽查し、この卡を経ないものは私鹽を以て論ずる。又商人を格外に優遇する方法によつて、招徠を獎勵してはいるが、商人の應募する者が稀であるから、經費銀四錢五分は特に嚴守せしめ、これ以上みだりに加徴する者は、賊を以て論ずることとする。

第五、鹽場近傍の州縣のうち、江都・甘泉・高郵・寶應・泰興の五州縣は、從來食鹽を額銷していたから、そのまゝ

とし、その他の泰州・東臺・興化・鹽城・阜寧・通州・如皋の七州縣は、これまで行銷の額引なく、竈戸について零鹽を買食していた。ところが、向來、私鹽の内十分の二三は商販の夾帶により、十分の五六は鹽竈の售銷するものであった。之を嚴重に取締らなければ、奸民が借端影射、囤積して私鹽を益々助長することになる。今就場徵課の法を實施するに至ったから、上述の七州縣の食鹽は、竈戸より買食するを禁じ、公垣について撥買することにする。

第六、一引六百斤は十包に分捆し、六十斤中包外に、別に消耗包索斤兩六斤を加える。運司から三聯大票を印發して分司に交付する。商販は分司に於て請運し、分司に於て所要の事項を記入し、一部は商販に渡して證明書とする。

第七、泰壩に停泊せる鹽船は、已に完課せる引に係れば、就場徵課の錢糧を納めんとする者は、泰壩官の衙門に於て完納し、六十斤の中包に解捆して稽查に便せしめ、又分司に通牒して大票を取り寄せて給し護運せしめる。²⁹⁾

以上は咸豐三年八月、實施した就場徵課法の概略であるが、この改革と關聯して先に食鹽を額銷していた江都・甘泉・高郵・寶應四州縣の科則を輕減している。蓋し、これ

らの地方は鹽場に接近せるため、從來、私鹽透漏防止の藩籬として、科則の上に於て、特別に優遇せられていた結果、鹽課も低價であつた。然るに、今鹽場地方では前述の通り、引半完課という未曾有の科則の輕減を實施するに至つたので、これらの四州縣が藩籬としての役割を果すためには、更に科則輕減の必要に迫られて來た。そこで咸豐四年六月には、江甘食岸では、每引課銀一兩三錢二分七釐餘、高寶は一兩二錢七分餘、各々經費銀一錢と定めた。鹽場に於ける引課二兩一錢八分に比べると、遙かに輕くなつたわけである。³⁰⁾

上述の如く、揚州が陷落したために、咸豐三年八月に、鹽運司を鹽場に移駐し、所謂就場徵課法を實施し、運道を改め、浙江に道を借り、溧水縣の東壩から楚西に駁運しようとした。然るに、盛康皇朝經世文續編卷五二「淮鹽改道議」(周騰虎)に

粵匪盤踞金陵鎮江。江路隔絕。淮鹽礙難行銷。上年權宜之計。奏借浙鹽引地。用小舟試行東壩。庶冀可收寧池等府食鹽之利。而蕪湖黃池一帶。均有賊艘。商賈俱有戒心。不敢前進。且自淮鹽停運之後。私鹽充斥。東壩鹽價。每斤僅買十文。有課之鹽。多半虧折。而淮南額產百萬。即寧池諸府。盡食官鹽。行銷亦不過十分之一。

故雖試行一年。僅同畫餅。

と見えるように、東壩上流の江路が通じないために、淮南鹽は一向に銷路がなく滞積した。又舊商で十餘萬の鹽課を納めた者も、未だに鹽を運ぶことが出来ない状態にあり、新商は冒險を憚って認運を肯じないので、鹽價は暴落し鹽場の竈戸は益々窮迫し、餬口の資なく、變じて匪賊となるものも現出した。政府では最早豪商大賈を當てにした裕課の法ばかりを先にした鹽の販賣法の上に頼って居られない。淮南二十場の貧竈窮丁を救恤するために小販の販賣に便利な設廠抽税の法を施行せざるをえなくなった。そこで咸豐五年正月、税錢を格外に輕減し引賣を易えて斤賣とし、鹽課の銀納を錢納に易えて小販を招徠し、場鹽を收買せしめて窮竈を救済すると共に、一方では鹽課の徵收を計らんとした。その法は清鹽法志卷一三三「商課」に次の如く見えている。

咸豐五年正月。議准。淮南各場。設廠抽税。每百斤抽税錢三百文。以二百文作爲報撥正稅。六十文作爲外銷經費。

この税額は前の就場徵課の税額每引二兩一錢八分二釐に比べると、十分の三にも及ばない。かゝる税課の激減に對し、

最初は鹽課が減少し、國家の要款を撥解することが出来ないうので反對があつたが、足許に火のついた政府としては、權宜の措置として聽許せざるをえなかったのである。又本改革に於ては、泰州等七州縣は鹽場に近いため食鹽を食ひ、從來引を頒布していなかったので抽税は半額とした。³²⁾

この設廠抽税法では、小販竈戸も廠に税を納めると鹽の販賣が出来るわけで、政府としては鹽課を増徴するというよりも、むしろ竈戸の窮迫を救恤する意味から、全く權宜の計として制定したものである。然るに、彼等は生産鹽の内、三四割を残して後は皆私鹽として闇に流してしまふ。

豪商の多量の運鹽は取締るのは容易であるが、多數の而も少量の鹽を運搬する小販をすべて取締ることはむづかしい。この三四割の生産鹽も、收買する商人がないのでいつまでも滞積する。又貧竈をして課款を完納させようとしても出来るものではない。咸豐五年には、税錢僅かに八萬貫を收めただけである。六年には二萬九千餘貫、咸豐七年春季の報解はたゞ四千餘貫に過ぎない。且つ又卡員は税錢を流用する等、弊端續出して究詰する能わざる状態で、結局失敗

に終った。³³⁾こゝに又改革案がもち上り、前制を廢することとし、各場稅卡を裁撤し、泰州に總局を置き、丁堰に通屬分局を、東臺に泰屬分局を置いて稅を納め、六百斤毎に大票二張を給し、每百斤銀一錢五分を收納し（一票九錢）一錢二分を以て報撥正稅、三分を外銷經費とし、場に赴いて捆鹽し、局から驗放することとした。³⁴⁾時に咸豐七年十月である。

前改革では、小販の招募に力を注ぎ、僅少なる鹽の運銷を許し、又稅課も銀納をやめて錢納に易えている。然るに前述の如く、小販は竈戸と結託して殆んど私鹽のみを販賣し、要隘に卡を設けて稽查し、稅を補わんとしたが、十分の一をも補うことが出来ない。歷年稅課は短絀し、小販の稽查は困難であるので、小販は合戸合辦せしめることとし、竈に下りて買鹽することを禁止した。又通州・如皋・泰州・東臺・興化・鹽城・阜寧附場の七州縣の食鹽は、稅の半額を納入することになっていたが、小販はこの特權を惡用し、重稅を避けて輕きに就かんとする弊害があつたので、一律に岸鹽に照して抽稅することにした。又小販出江の道途を指定して、他道によるを禁じ、先に任命した董事も廢止し

て成本を輕くし、大商の招徠に利した。³⁵⁾

こゝで特に注意すべきことは、政府の方針が小販招徠より大商招徠に轉じたことである。稅課が錢文納入より銀納に變つたのもこれがためである。淮南鹽法紀略卷一泰棧章程（咸豐七年六月）に

股實之販。裹足不前。非示以有利可圖。難期踴躍。擬令銀錢并收。凡五百擔以上之大販。完納稅錢。准其以銀一兩抵制錢二千文。并准具呈請運時。先納一半。到棧發販時。再納一半。以示體恤。而廣招徠。其在場在卡納稅。及零星小販。一概不准援照。所以然者。蓋欲收小販之利權。而漸漸歸於大販。收散漫之竈鹽。而漸漸歸於商垣。久之大販多則私販自少。垣鹽多則竈私自少。

と見え、政府では大商の鹽課納入に銀を以てするを許している。從來、鹽商は鹽課に銀を納入することを以て苦としたのであるが、³⁶⁾こゝに至つて銀を以て鹽課を納入することが何故に大賈を優恤することになるのであろうか。それは結局銀價の低落から來ている。銀價は嘉慶の末年から漸次昂騰し初め、道光時代は漸騰の道程を辿り、咸豐二年頃³⁷⁾絶頂に達し一兩二千二百文から三千文という最高價を示した。然るに四年頃から漸く下り坂となり、咸豐五六年頃には一兩千四五百文位に減じ、七年には千百文乃至千三百文

に暴落している。³⁸⁾ 因みに咸豐七年、江浙における錢價の湧貴は英國が上海において制錢を銀を以て收買したためであった。ところで銀を多く所有するのは大賈である。又鹽の賣價は錢文である。安價な銀を以て鹽を買い、之を賣りて高價な錢文を得る。而も市價一兩千百文乃至千三百文程の銀を政府の方では一兩二千文の割合で銀を鹽課として納入することを許すのであるから、大賈には二重の利潤があるわけである。

併し、小販は依然として鹽課納入には錢文を以てするかから利益が少く、自然に大賈に壓倒せられて、消滅するというのが政府の肚である。かくして鹽課納入には銀錢併用の權宜の計が取られたのである。この政策が相當成功したことは淮南鹽法紀略卷二「稅鹽加五配割詳」(咸豐七年十二月署運司聯英)に

各販運守成規。數月以來。毫無紊亂。銷市暢旺。南鹽漸有起色。

と見えている。このことは最も收納鹽課の上に具體的にあらわれている。即ち、咸豐五六年から七年六月終までには鹽課として錢十餘萬貫、銀一萬四千餘兩を收納したのに對し、七年七月から九年六月まで滿二箇年間に、銀五十一萬

餘兩、錢二萬七千二百餘貫を収めている。假に銀一兩錢千六百文として計算すると、從來よりも約七倍の鹽課を收得しているわけである。³⁹⁾ 併し、楚西各岸共に未だ上流地方に運銷することが出來ず、近鄰で零售したので、銷數も大して増加せず、咸豐十一年頃、毎年の奏報稅課は二十餘萬兩前後であつた。⁴⁰⁾ 鹽法議略卷一に

行之(就場收稅)數年。亦毫無起色。總緣長江不通。鹽無出路。即辦無善法。

と言っているのは事實であつて、本改革案が從來の改革案に對して多少は成功したというものゝ、道光時代の鹽課銀五六百萬兩に比べると、僅か二十數萬兩の鹽課を以てしては全く問題にならない。

併し乍ら、一面から考えると、この鹽課の増收は太平軍に占領せられていた淮南行鹽地が漸次收復せられてゆくことを意味するものであるが、それと共に政府の大商招徠の積極的な政策が事宜に適したとも考えられる。即ち、政府では前述の通り、鹽課の銀納と分納政策とによつて大商を優遇招徠しようとしたのみならず、更に咸豐八年正月には、稅鹽加五配割政策を實施した。即ち運鹽額は每票六擔、每

擔は百斤であるが、之に五割の配割を加える。之を割引と稱する。更に之に一割の消耗・包索五斤を加え、每擔百七十斤、兩包とする。割引は正引の數に照して每擔正雜稅銀七分五釐、每票四錢五分を加收するが（正引稅銀每票一兩餘）、各衙門の經費及び一切の雜用は從來通り正引六擔に照して計算し、割引の名に藉りて別に徵收するを禁じ、商人を優遇した。即ち十萬票の護照の請求があれば、政府としては十五萬票の稅を收得しうるわけで、國課を増すのみならず、大販を恤することが出來、雙方に裨益があつた。⁴¹⁾

尤もこの配割の加増は私鹽夾帶を防ぐ意味もあつたようである。前制では六擔六百餘斤であるが、包が大きくて鹽が少いので、更に私鹽を包内に夾帶する恐れがあつた。そこで九擔九百斤として私鹽夾帶の餘裕をなからしめたわけである。⁴²⁾

上述の如く、咸豐七年十月には、總局分局をおき、鹽場に於て捆鹽せしめることにしたが、淮南鹽場は廣大にして私鹽透漏の取締りが困難で、竈丁と販戸とは結託して鹽を闇に流すので、收稅額は前述の如く實に寥々たるものであつた。そこで請運の販戸は鹽場の場商と取引するを許し、

竈戸と聯絡することを禁止したために、私鹽も漸く減少し、兩年以來、稍々成效を收め、各商は風を聞いて請運するに至つたが、これ亦一時の權宜の計に過ぎなかつた。こゝに於て、咸豐九年七月、儀徵公棧の式に照し、泰州に公棧を設立し、場商をして垣鹽をすべて公棧に運搬して、こゝに堆儲して發販せしめ、販戸が鹽場に下りて鹽を請領することとを禁止し、取締りを容易ならしめることとした。

かくて、棧務は一切商人をして經理せしめ、只鹽運司が之を監督するに止める。場商が鹽を公棧に運搬し、或は販戸が公棧から鹽を買つて運搬するには、私鹽船と混淆するなきよう小船を用いるを禁じ、屯船を用いしめる。泰州に公棧を設けたので、泰屬の東臺分公司は不必要であるから廢止する。只通屬の各場は、泰州を離れてゐるから、丁堰分局には棧を設けて泰棧の如く辦理させる。これまで場垣の桶價は奸商が値段を叩いて買つて竈戸を困しめていたので、草價を酌量して適宜收買價を定め、竈戸の利益を考慮してやる。又竈私を禁止するため、垣商をして頭長を率同して火伏を嚴査し、竈戸を巡査せしめて取締を嚴重にする。或は向來各場の河道は旱魃に遇うと水深が淺くなり、鹽船の

行運が困難であるから、水量の多い時に、出来るだけ多くの鹽を公棧に運び堆儲しておき、阻滯の患や、販戸待鹽の苦を無からしめる。又販戸の場に下るを禁じ、公棧にて買わしめ、鹽價長落の權を販戸から場商に移し、合理的な售價を定め、場商の資本を虧かしめる心配をなくし、廣く鹽を收買せしめ、竈戸の煎鹽をして歸する所あり、透漏なからしめることとした。⁴³⁾

ところが泰州は裏下河の門戸に當り、咸豐十年六月に、儀徵の銷路が驟かに開けてから、各艇師運鹽の者が多數泰州に來った。中には不逞の徒が多數混じているが、言語が各々異つて居り、稽查が困難であるから、泰州の入口の口岸鎮に分棧を設立し、泰州の鹽は皆こゝに運搬堆儲して、不逞の徒が鹽場の腹地に入るを制限する。またこゝで鹽價を收め、鹽を發販して客販に便宜を與えることとした。時に咸豐十年八月である。⁴⁴⁾

然らば、當時如何程の鹽引が運銷せられていたであろうか。清鹽法志卷一三四、咸豐十一年六月袁甲三の上奏によると、毎年額銷二十四萬引であつたが、咸豐十年には僅か十萬引、十一年には銷數七萬引に過ぎぬ状態であつた。元

來淮南額銷引は百四十萬、陸建瀛の改革によつて百九萬餘引に減じたが、すべて暢銷していた。現今の銷數を從來のそれに比べると、二十分の一乃至十五分の一に減少しているわけである。尤もかゝる状態も已に述べた如く、咸豐三四五六年に比べると、餘程起色がありといわれているのであるから、以て咸豐時代淮南鹽政の弊壞の狀を察すべきである。

咸豐時代、淮南鹽政崩壞の根本原因は、前述の如く、太平軍叛亂の勃興蔓延によつて淮南行鹽地が蹂躪せられたことに因るが、崩壞した鹽政が容易に再興しえなかつたのは、政府が浩繁なる軍需費の捻出のために、再起しかけた鹽商に對し、過重なる捐輸を課したことも一つの重要な原因であつた。清鹽法志卷一三四に

咸豐十一年四月。以江北糧臺及清淮防局餉需支絀。令淮南棧商售鹽一引。扣繳垣商捐輸桶價五十文。

とあり、同年五月の條には

奏准。院營餉需支絀。將淮南票鹽。每引捐錢三百文。

と見えてゐる。この額が同治八年軍事が終焉するまでに百數十萬貫に達したというから、毎年平均十萬貫餘の捐輸が

あつたわけである。その他礮船置造の經費等も鹽商の負擔であつた。⁴⁶⁾沿江内河には釐卡在林立して運商の售銷を甚だしく妨げていたことは更に稿を改めて説くであらう。

五、官運の倡行

通州屬の泰興縣はこれまで揚州府の江都・甘泉・高郵・寶應の四州縣と共に、食鹽地分として三千五百引を額銷すべきであつたが何分にも鹽場に近接せる關係上、私鹽の透漏が甚だしく、額引が完銷されたことはなかつた。道光三十年、票法に改革して以來、咸豐九年まで十年間に、僅かに千五百引、平均毎年百五十引を銷賣したのにすぎなかつた。従前、本縣は行鹽道途には當つていなかったが、江路が梗塞して以來、行鹽が本縣を通過するようになり、小販票鹽を沿途で零賣し、私鹽が益々蔓延するようになった。官鹽は高く私鹽は安いので、人民はすべて私鹽を歡迎する。特に縣内の富豪は官鹽等少しも買食しない。一體本縣割當の鹽はすべて地保に責任をもたせて領銷させていたが、地保は富豪の賄を受けて、富豪には官鹽を割當てず、懦弱の小民に強制的に賣りつけるので、擾累が甚だしかった。こ

の弊政を革除しなければ官鹽の行銷はむづかしい。そこで咸豐九年十月、泰興縣に官運を試行することとし翌十年四月、官運章程を詳定して實施に移した。⁴⁸⁾

第一に縣民は貧富の別なく役所で口數、年間需要量を調査し、戸毎に冊を造り、その數量に應じてその代價を納めさせ、鹽票を給し、之を局に持參して鹽を受領する。但し、縣城から遠い田舎では、縣城に赴いて受領するには運費が鹽價より高くなるから、一定の期日を定め、その地の額票に應じて局から鹽を其地に運搬して配銷する。尙私鹽を買食し官鹽を食わぬ者は嚴罰に處する。

第二、あらゆる浮費を刪減し、民生の更生に資し、鹽課を完納させる。收支餘利があれば公儲に提出し、七割を以て穀を買い、地方荒歉の用に備え、三割は保嬰・恤廢・孤貧・書院等の不足の用に撥補する。もし足らなければ全穀を買ふことにする。該穀物は數年米價の昂貴に遇えば、協議の上賣却して市價を平らかにする。其錢は貸出して利息を計り、成熟を俟って又買補して倉庫に納め、災歎に備える。

第三、局の役人と、民間から公舉した廉正の董事數人と

に一切の經理を任せ、責任を分つて稽核を嚴重にする。

第四、鹽價を減じて樂銷を勸める。泰縣の官鹽價はこれまで毎斤二十四文であつたが、四文を減じて二十文とする。私鹽價に比べて僅かばかり高いだけであるから、縣民はむやみに賤價を貪つて私鹽を食うことをしないであらう。⁴⁹⁾

以上は泰興縣官運の概略であるが、この後、同治から宣統年間に亘つて、兩淮に於ては、滁州・來安・全椒・通・如六縣、建昌徐淮六岸、河南の西遂確三縣に次々に官運が施行せられるが、その先例を開いたものとして注目に値する。兩淮における官運倡行の事情については、清鹽法志卷

一一八官運に

兩淮當全盛時。無所謂官運也。有之則自軍興後始。方咸豐年間。泰興縣岸。由官辦運。迨同治以後。重整淮鹺。即經招商認額。惟江運之滁州來安以北。私充斥。無商認辦。乃設局試辦官運。全椒一縣。踵而行之。而淮北之桃宿睢邳。初亦由官倡導。繼而招商運銷。南撤岸縣。復歸官運。後又推廣及於山清。謂之六岸。一以鞏江運之藩籬。一以樹票鹽之屏蔽也。至江西建昌一府。閩私侵灌。久成廢岸。河南西・遂・確三縣。亦爲蘆私所占。淮引不行。宣統年間。先後改行官運。減價敵私。以資抵制。他若通如六岸。偏近場鹽。現亦設有食商。而光緒時。開關口岸。實始官運。

と見えてゐる。即ち官運は鹽政史上から考察する時、全く一時的便法であつて、招商運銷を倡導する、いわば誘い水の役割を演ずるものであつた。かゝる方法が咸豐時代に盛行を見た所に、同時代に於ける鹽政弊壞の程度を察すべきである。營利に敏感なる商人は形勢を觀望して承運を望まず、政府では人民の鹽の缺乏を放置する能わず、已むを得ず官運を實施するに至つたのである。

六、結 び

陸建瀛の淮南鹽政改革から、咸豐三年八月、同五年正月の改革、並に同七年十月の改革に至るまで、每引鹽課徵收額の遞減の狀況は、一面から考えると、鹽政改革が成效を收めつゝあつたようにも見えるが、實際は全く反對で、政府が鹽商を特別に招徠するために、已むを得ずして取つた急場しのぎの窮餘策の顯われにすぎないことは、前述の通りである。咸豐時代を通じて、鹽政は朝改暮變、一定の方針がなく、全く一時的の彌縫策に終始し、紊亂を極めた。それは結局行鹽地が常に太平軍の侵寇にさらされ、鹽商が全く應募を躊躇したためである。一方揚州や鎮江等の陷落

により、或いは行鹽地の消失によって大きな資本を有していた鹽商が没落したことも咸豐時代における鹽政崩壞の重要な原因の一つである。鹽商の没落については、道光から咸豐時代にかけて、阿片の輸入その他のため銀が國外に流出し、鹽商の資金が枯渇したことも併せ考うべきであろう。⁵⁰⁾

ところで咸豐時代における淮南鹽政は咸豐七・八年頃を境としてその前期と後期とでは大分様相が變つて來てゐる。前期においては、已に先に述べたように、鹽場の生産設備が完備しており、竈戸の生産鹽を全部收買することが出來ぬことが大きな問題であつたが、咸豐七八年の頃には漸く行鹽地が收復されて來た。然るに沈文肅公政書卷六「收回淮南引地應遵部議迅速舉行摺」に

咸豐末年。兩淮繳廢埤荒。商逃竈困。幾蕩然矣。

とあり、また、清鹽法志卷一〇九咸豐八年正月の條にも

淮南自遭兵燹。以運商星散。場商亦皆逃亡。竈戶停煎。埤荒繳廢。

大局全廢。

と見えるように、鹽商の没落逃亡は勿論のこと、生産設備も全く荒廢に歸した。從來淮南には煎鹽の鐵が二萬六千一百六十九口あつたが、この頃使用に堪えるものは僅かに十

分の三にすぎず、修理可能のものを加えても十分の四を數えるに過ぎぬ有様であつた。⁵¹⁾この事實は大半の竈戸の没落を意味するものに外ならない。かように咸豐時代の後半においては淮南行鹽地は漸く收復せられて來るが、鹽場は兵亂のため生産設備が荒廢し、生産鹽の不足が大きな問題となりつゝあつた。これより先、咸豐三年八月から同七年十

二月まで、淮南においては、兵亂のため鹽務官吏の生産鹽額の中央への報告は中止せられていた。この生産鹽の盈絀によつて官吏の黜陟がなされていたのであるが、その報告の停止によつて、鹽務官は風潮水旱に藉口して生産鹽を闇に流す等の惡事を働いていた。このことが生産鹽の不足を來す原因でもあつた。然るに、咸豐八年正月に至つて、鹽務官吏の煎鹽額に對する題報考覈を再び始めたことは注目⁵²⁾に値する。この年から鹽課が僅少ながらも遞増したことは、淮南鹽政が漸次甦生の道を辿りつゝあつたことを示すものに外ならない。言いかえると、太平軍の勢力の失墜と反比例して、淮南鹽の行鹽地は次第に收復せられつゝあつたのである。⁵³⁾清鹽法志卷一〇九咸豐八年正月の條に

金陵克復。江路疏通。不患銷數不暢。⁵⁴⁾轉恐無鹽捆運。

とあるように、今や淮南における生産鹽の増産が問題となつた所に淮南鹽政回復の曙光が見られる。同治時代に入り、鹽南鹽政は曾國藩・李鴻章によって半ば恒久的な鹽政が樹立せられ、淮南鹽政は三度復活するのである。

補註

- ①拙稿「塩と支那社會」（東亞人文學報第三卷第一號、一八八頁）
- ②同右
- ③駱秉章「採買淮鹽濟食分岸納課濟餉疏」（咸豐五年）（駱文忠公奏議卷五湘中稿）
- ④清塩法志卷一三三咸豐三年條
- ⑤前掲駱秉章奏議
- ⑥塩法議略卷上
- ⑦同前
- ⑧周濟「淮鹺問答并序」（盛康皇朝經世文續編卷五一）
- ⑨清塩法志卷一三二「借運鄰塩」咸豐四年條
- ⑩清塩法志卷一三二「借運鄰塩」
- ⑪東華續錄咸豐一九
- ⑫嚴如煜「論川塩」（皇朝經世文編卷五〇）
- ⑬清塩法志卷一三二「借運鄰塩」
- ⑭淮南塩法紀略卷三「湖廣督院官〔文〕由楚招商採辦淮塩摺」
- ⑮清塩法志卷一三二「借運鄰塩」・同書卷一三九「鄰稅」
- ⑯淮南塩法紀略卷三「楚商試運淮塩詳」（咸豐十一年九月運司喬松年）
- ⑰同③

- ⑰清塩法志卷一三二「借運鄰塩」
- ⑱曾文正公全集奏稿卷六「請部撥浙引用塩抵餉摺」
- ⑲塩法通志卷七三「咸豐六年湘岸始抽粵塩稅釐」
- ⑳清塩法志卷一三二「借運鄰塩」・同書卷一三九「鄰稅」
- ㉑同前
- ㉒同書卷一三九「湖北川鹽課利」
- ㉓同書卷一三九「咸豐五年十二月條」
- ㉔同前
- ㉕同書卷一三九「鄰稅」
- ㉖同書卷一四一「鄰稅」
- ㉗同書卷一三五「加價」
- ㉘同書卷一四六「官制・運司」
- ㉙淮南塩法紀略卷一「督塩院怡〔良〕就場徵課并改道運銷摺」
- ㉚清塩法志卷一三三「商課」
- ㉛淮南塩法紀略卷一「督塩院怡〔良〕江路梗阻片引不行未能依限造報奏銷摺」
- ㉜清塩法志卷一三三「商課」
- ㉝同書卷一二六「江甘食岸」
- ㉞淮南塩法紀略卷一「就場課稅」
- ㉟清塩法志卷一三三「商課」
- ㊱淮南塩法紀略卷一「就場課稅」
- ㊲淮南塩法紀略卷一「督塩院怡〔良〕試辦就場抽稅摺」
- ㊳同書卷三「楚商試運淮塩詳」
- ㊴清塩法志卷一一一「引地引額」・同書卷一三三「商課」
- ㊵淮南塩法紀略卷二「泰州局棧」

清塩法志卷一一「引地引額」・同書卷一三三「商課」

③⑤ 淮南塩法紀略卷二「泰州設總局稟」

③⑥ 清代の塩政—陶澍の塩政改革より觀たる—(近刊)

③⑦ 小竹文夫氏「清代に於ける銀錢比價の變動」(近世支那經濟史研究)所收)

③⑧

咸豐同治時代銀價變動表

年代	每兩銀價	備考	典據
咸豐元年	二〇〇〇文	蘇常松鎮太	曾文正公全集奏稿卷一「備陳民間疾苦疏」
二年	三〇〇〇—三〇〇〇文	浙江・江蘇	盛康皇朝經世文續編三四「治賦篇」七
三、四年	二〇〇〇—二〇〇〇文	江・浙州縣	淮南塩法紀略一「就場課稅」
四年九月	二〇〇〇文	淮南行塩地	盛康皇朝經世文續編三六
五年	二〇〇〇文	大河以南	籌辦夷務始末咸豐朝一七
五、六年	四〇〇—二〇〇〇文	江浙	淮南塩法紀略二「泰州局棧」
七年九月	一〇〇〇文	江浙	光緒會典事例二二〇
七年十月	一三〇〇文	淮南行塩地	清塩法志一三四
九年十二月	一六〇〇文	〃	盛康皇朝經世文續編三六
十一年	二〇〇〇文	京城公定	〃
同治一、二年	一四〇〇文	安徽抵徵銀	〃
三年	一六〇〇文	〃	〃

(一三三三文) 通泰州

(一三六三文) 安徽

二〇〇〇文

二〇〇—二〇〇〇文 各省

二〇〇〇文 京城公定

(一六六六文) 市價

一五〇〇文 鄂湘皖西

一八〇〇文 長蘆

一八〇〇文 湖北

一五〇〇文 淮南官定

清塩法志一二〇

曾文正公全集雜著、「淮塩運文院岸章程」

李文忠公全集奏稿一〇「減漕未盡事宜摺」

盛康皇朝經世文續編五九

光緒會典事例二二〇

曾文正公全集奏稿三二

清塩法志一三〇

曾文正公全集奏稿三四「廣網德累請減成本摺」

皇朝經世文續編四四「楚岸塩引淮川分界行銷疏」

清塩法志一三四

③⑨ 淮南塩法紀略卷二「督塩院何(奎清)覆奏籌辦塩務事宜摺」

④〇 同書卷三「楚商試運淮塩詳」

④一 同書卷二「稅塩加五配割詳」

④二 同書卷三「楚商試運淮塩詳」

④三 清塩法志卷一二〇「配運」・同書卷一五〇「塩棧」

④四 同前

④五 塩法通志卷七三「漕皖抽釐濟餉」

④六 清塩法志卷一三四「漕捐皖捐」

④七 同書卷一二二「引目」

④八 同書卷一一八「官運」

④九 同前

⑤〇 同注③⑨

⑤一 清塩法志卷一〇九、咸豐八年正月條

⑤二 同前

⑤三 清史稿本紀

(昭和二十三年十月稿、昭和二十九年十二月補訂)

Huai-nan 淮南 Salt Policy of Hsien-fêng 咸豐 of the Ch'ing Dynasty

T. Saeki

When the revolting army of the Tai-ping-tien-kuo 太平天國 occupied the valley of the Yang-tzu 揚子, the distribution of salt was stopped in such important areas as Hu-pei 湖北, Hu-nan 湖南 and Chiang-hsi 江西 and the inhabitants were suffering from the lack of salt. The Government endeavoured to enforce the merchants or to assume the policy to distribute the salt, but in vain. Taking advantage of it, the black markets were opened and the monopoly income from salt of the Government was greatly decreased. At the same time, however, the Government was overburdened with the military expences to check the revolts and imposed a tax upon the salt which was traded among these black markets. This tax was called yen-li 鹽釐, and was extended henceforward on a nation-wide scale.